



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 天界 1931, 11(127)

ISSUE DATE:

1931-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161730>

RIGHT:

大正九年十二月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回二十五日發行)
昭和六年十月二十五日發行



第百二十七號 (第十一卷)



昭和六年十一月號

THE HEAVENS November 1931

附屬圖書館 理學博士 山本一清 理學士 竹田新一郎

目次

D. B. ピケリング氏を迎へし日	口繪
來年の「年鑑」より	473
天文電報の話 (1)	理學博士 上田 穰 474
獅子座流星群	流星課長 小嶺孝二郎 486
天文雜報	494
觀測帳	花山天文臺 中村 要 495
星座漫筆『黃道光の象徴』	東京野尻抱影 497
本年十一月の天象	498
流星課報告	502

CONTENTS: D. B. Pickerings Visiting Kwasan Observatory (Frontispiece); Joe Ueta, Story of Astronomical Telegrams (474); Kijiro Komaki, The Leonid Meteors (486); Miscellaneous Notes (494); Monthly Reports of the Observing Section, S. A. F. (444); Kaname Nishimura, My Observation Note-Book (495); Hovei Noziri, "The Symbol of Zodiacal Lights" (497); The Heavens of November, 1931 (498); Reports (500).

發行會 天文同好會 內大學帝國都京

天 文 同 好 會

本 年 の 總 會 の 豫 告

〔廣 島 市 に 於 い て〕

昭和六年十一月二十一日(土曜日)

記 念 大 講 演 會 〔廣島市，高等師範學校講堂にて〕午後六時

講 演 山 本 一 清 氏 〔彗星の天文學〕

中 村 要 氏 (題未定)

一 般 に 公 開 (無料)

昭和六年十一月二十二日(日曜)午前九時より正午まで

天 文 展 覽 會 〔文理科大學にて〕

之れは京都天文學會と協同主催にて，午前九時より正午まで開場。

會員と其の友人にのみ公開。

記 念 總 會

協 議 會 (午後一時から三時まで)

會の諸報告及び諸協議 〔高等師範學校第一會議室にて〕

記念懇親晩餐會 (午後四時から) 〔宮島にて〕

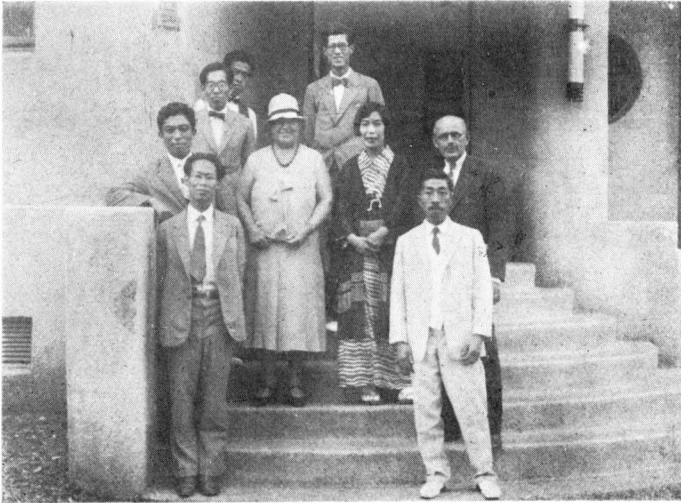
昭和六年十一月二十三日(月曜祭日)午後六時より

天 體 觀 望 (午後七時から九時まで) 〔文理科大學樓上にて〕

D. B. ピケリング夫妻を迎へし日

(花山天文臺にて)

昭和6年7月15日



古川 柴田

森川

稲葉 ビ夫人 上田夫人 ビ氏

宮澤

上田

(C. 太陽)

太陽の全形 白晝の大空に輝く太陽のまん丸い姿を撮つた寫眞で、殊に之れは去る1917年八月12日、大小無數の黒點が盛んに太陽面上で活躍してゐる日の景觀である。之れに尙ほ比較のため我が地球と月の大きさを書き加へた。寫眞の中央にある圓い黒點が地球で、其れから左へ眞直に引いた一線の左端にあるのが月の大きさである。地球を巡る月の軌道も畫かれてある。こんなものを悉く包む程の太陽の巨體には驚かされる。ホンの小さい地方的局部的の事件である黒點でさへ、最大のものは地球の十倍以上ある。太陽全體の直徑は地球の109倍であり、體積は1300000倍である。又、太陽の質量は地球の330000倍。比重は水の1.4倍。地球から太陽までの距離は150000000軒(3800000里)。光が達するのに8分18秒かゝる遠距離である。(之れは米國キルソン山天文臺で撮影したものである)

黒點 太陽の光球面上には度々黒點¹が現はれる。多くは誠に小さいものであるが、稀には非常に大きくて、地球の十倍以上の直徑を持つものもある。此の寫眞は1905年七月16日に露國ブルコフ天文臺で撮影したもので、直徑は地球の約6倍。中央に光球ガスの橋が架けられて、黒點は二つに分裂してゐる。黒點には「暗部¹」と「半暗部¹」とがあること、周囲の輪廓が凸凹不規則で、又、崩れ易いことなど、寫眞にもよく表はれてゐる。黒點は光球中の熱ガスの旋風であつて、強い磁性を有つてゐる、光球面に比べて光輝は稍淡いけれど、熱は殆んど同じである。黒點は太陽の活動力の代表者であつて、黒點の有無は太陽面全體の活力に著しい影響を持つて居るが、尙ほ我が地球にも、オーロラや、磁氣嵐等を起させる。最初の黒點は1609年イタリヤのガリレオが発見したが、支那では漢の時代から日中に三脚烏があるとして知つてゐた。

太陽のカルシウム像 太陽の表面には六十幾種の元素ガスが渦を卷いてゐる。中にも水素や、マグネシウムや、ヘリウムや、電離したカルシウムなどは最も活動性に富んだものである。此の寫眞は米國ヤークス天文臺の分光太陽寫眞儀で太陽を撮影したもので、特に電離カルシウムの發するH線の光を利用した。従つて寫眞の全部は即ち太陽に於ける電離カルシウムの分布を示すものである。全面にわたつて頗る複雑な現はれ方をしてゐるが、殊に輝やいたカルシウム雲が黒點を包み、尙ほ長く東西に延びて、南北二列に略々相並んでゐるのは目立つ。此の輝雲を「羊毛斑¹」と呼ぶ。黒點は消えてからも、羊毛斑は永く残り、又、形も可なり大きいので、太陽活動を調査研究するのに之れは重要な材料である。

紅焰 之れは太陽の外部にある色球(クロモスフェア)の一部が高く上昇してゐるもので、所謂「紅焰¹」と呼ぶ、其の理由は、之れが夥しい水素ガスを含んでゐるため、眼には紅色に見えるからである。三十年程前までは、紅焰や色球は、日蝕皆既の時でなければ見えなかつたものであるが、近年は分光寫眞儀により、平常でも容易に觀察し得るやうになつた。此の寫眞は1909年八月21日米國キルソン山天文臺で撮影したものである。

日蝕コロナ 日蝕とは、新月の時に、月が太陽の形を遮る時に起るものであるが、皆既日蝕は、月が太陽を全部かくして了つた現象である。皆既日蝕の場合には、白晝であるに拘らず、天地俄かに暗冥となり、空には日光が消えて、星々が輝やき、暗黒な太陽のまはりには神秘的なコロナが現はれる。コロナは綠色の美しい輝やきで、太陽の直徑又は其れ以上遠くまで延びてゐる。コロナの全形は太陽黒點や紅焰の影響を受けて甚だしく變る。此の寫眞は1918年六月8日、太平洋と北米大陸とで見た日蝕の時のコロナである。コロナは日蝕皆既の時以外には殆んど全く見えない。

(D. 遊星)

金星 金星は太陽系の第二番目の大遊星で、地球の軌道のすぐ内側を巡つてゐる。こうした軌道の關係上、いつも太陽と共に出没し、時々、夕暮れの西空に現はれて「宵の明星」と呼ばれ、又、早曉の東空に現はれて、「明けの明星」と呼ばれる。光輝は驚くべく強く、稀には白晝に眼で見えることもある。金星のラテン名は Venus (ヴァイナス) といひ、美の神の象徴で、支那では昔しから「太白」と呼んでゐた。金星は地球の兄弟分で、形や大きさは殆んど同一であるし、光や熱を太陽から受けてゐることも變りがない。従つて、あの輝やかしい光は日光の反射である。望遠鏡で金星を見ると、三日月形に見えたり、半月形に見えたり、満月の形に見えたり、いろいろ變化する。皆之れ月の輝きと同理である。此の圖は米國ヤークス天文臺でバーナード教授が大望遠鏡で撮影した寫眞である。

火星 赤褐色の大遊星で、活潑に黄道を運動しはるため、昔ギリシャ・ローマでは之れを軍神 Mars (マルス) の現はれと考へたが、支那では「熒惑」と呼んだ。この火星は地球のすぐ外側の軌道を巡つてゐるので、二年二ヶ月毎に著しく地球に近づいて来る。光輝も木星以上になることがある。こうして近づいて来る頃、高倍率の望遠鏡で眺めると面白い。まづ南北兩極には「極冠」と呼ぶ白色の水雪が見え、赤道方面には暗綠色の斑點(植物地帯)、又、中緯度には褐色の沙漠が見える。尚ほ、大小無數の「運河」も見える。寫眞の左上は1905年5月28日佛國モロイ氏が觀察したもの、右上は同年6月9日米國のローエル氏が觀察したもの、又、下のは同年6月9日に米國ランブランド氏が寫眞撮影したものである。

木星 木星は太陽系中の最大の遊星で、直徑は地球の十餘倍、質量は300倍、距離は一億五千萬里乃至二億里である。十二ヶ年で黄道を一週する。雄大な威容を備へた星である。ギリシャ・ローマでは之れを首神(ジュピター) Jupiter に擬し、支那では之れを「歲星」と呼んで、年の十二支を示すものとした。初めて之れを望遠鏡で見たのはガリレオで、忽ち四個の衛星を發見し、地動説の確證を得たと稱した。現代の望遠鏡で見ると、木星の表面には東西の方向に多くの條線が浮遊し、變化極りなく、又、時に衛星や其の影が陰顯する。此の圖は米國リク天文臺でキラー氏が觀察したもので、全景は略々代表的なものである。左上には大きい赤斑が見えてゐる。又、中央右部には一衛星の影が星の表面に落ちて、日蝕を起してゐる。

土星 月世界の美景と共に、全天界の珍象の双璧と稱へられる「我等の土星」である。全く無類の此の奇星こそは、初めて見る人が誰も皆驚かざるはない。あの美しい輪!! 此の輪は三百年前ハイゲンズが發見し、三十年前、キラー氏が分光觀測によつて、微星の集團であることを看破したものである。輪は「カシウの空隙」によつて二つに分れてゐる。土星は木星に次ぐ大遊星で、三十年を以つて全天を一週し、悠々と運動する。ラテン名は Saturn (サターン)、昔の支那では「鎮星」と呼んでゐる。

小遊星エロス 火星より大きく木星よりも小さい軌道を畫いて太陽の周圍を巡るのが小遊星である。個々の體積は小さいけれど、星の數は非常に多くて、今までに既に一千個以上知られ、尚ほ毎年數十個づつ新しく發見されて行く。去1930年末から世間で評判になつた「エロス」は第433番の小遊星であつて、珍らしいことにも時々火星より内側へ巡つて来るほどの小軌道を畫き、地球へも一千万里以内に近づくことがある。此の寫眞は1930年10月に京都花山天文臺で柴田理學士が撮影したものであつて、僅々數十分時間の間にも星が運動したことが明らかに現はれてゐる。エロスは普通一般の星と違つて、形が長細く、これが五時間の週期で自轉してゐることなどが知れた。

天文同好會

大正九年(1920年創立)

會長	山本一清(京都市東一條)〔電話上5098〕
副會長	水野千里(岡山市門田21)
幹事	竹田新一郎(京都市百萬遍京都アパートメント)〔電話上4488〕
	中村要(京都帝國大學花山天文臺)〔電話上6165〕
會計	池田政晴(京都市左京區岡崎黒谷町11)
本部	京都帝國大學理學部天文學教室〔電話上980/222〕
倉敷天文臺	岡山縣倉敷市〔電話35〕——原名譽臺長〔電話75〕

天文同好會規則

- 第一條 此ノ會ヲ天文同好會ト云フ
- 第二條 此ノ會ハ天文學ノ了解ヲ進メ兼ネテ同好者相互ノ親睦ヲ増スノガ目的デア
ル
- 第三條 本部ヲ京都帝國大學天文部内ニ置ク又會員密集ノ地ニハ支部ヲ置ク
- 第四條 此ノ會ハ其ノ目的ヲ達スル爲メ次ノ事業ヲ行フ
- 一. 講演(例會毎月一回, 總會年一回, 其他臨時會)
 - 二. 講習(各地デ臨時ニ開ク)
 - 三. 雜誌圖書ノ出版(雜誌ハ毎月會員ニ無代配布, 圖書ハ隨時)
 - 四. 見學及ビ實地觀測
 - 五. 天文臺ノ經營(會員ニハ特權ガアル)
- 第五條 此ノ會ノ目的ニ賛スルモノハ誰デモ入會ガ出來ル(申込ノ際ハ住所職業生
年ヲ記入セラレタイ。)會費ハ每曆年度ニツキ前納金參圓トス. 但シ中途入會ノ場
合ハ月參拾錢ノ割デ年末マデ前納ノ事
- 第六條 本會ノ經營ヲ支持スル趣意デ每年金貳拾圓以上ヲ貢出スル者ヲ維持會員ト
スル
- 第七條 一時金壹百圓以上ヲ寄附スル者及ビ總會ニテ特ニ推舉セラレタ者ヲ名譽會
員トスル
- 第八條 此ノ會ノ役員ハ次ノ通り
- 會長 一名 副會長 一名 幹事 二名 會計 一名
- 會長ト副會長トハ總會デ選舉セラレルモノデ, 任期ハ二ケ年. 幹事ト會計トハ會
長ノ指名デ任期一ケ年
- 第九條 此ノ會ニ評議員若干名ヲ置キ, 役員ノ相談相手トナル

天文同好會觀測部 (Observing Section, S. A. F.)

大正十年九月に組織されたもので, 同好會員中の實際天文研究に興味を
有する者より成る. 今下記の八課に分れてゐる.

1. 流星課 (課長 小横孝二郎, 幹事 宮澤 堂)
2. 彗星課 (課長 柴田淑次)
3. 變光星課 (課長 稻葉通義)
4. 太陽課 (課長 上島 昇, 幹事 山本英子)
5. 黃道光課 (課長 荒木健兒, 同 龜井壽彦)
6. 豫報課 (課長 山本一清)
7. 機械課 (課長 中村 要)
8. 寫眞課 (課長 中村 要)

此の觀測部の觀測報告は京都帝國大學花山天文臺發行の**ブレテン**(英文報
告)に發表られせる.

天 界第二百二十七號 昭和六年十月二十四日 印刷 定價金 參拾錢
昭和六年十月二十五日 發行 郵税金壹錢

編輯兼發行者 京都帝國大學内(振替貯金口座大阪56765) 天文同好會(代表者山本一清)

印刷所 京都市中京區柳馬場三條南入 株式會社似玉堂(電本426. 427. 4501)

印刷者 京都市中京區柳馬場三條南入 福井松之助

賣捌所 東京市神田區錦町1の19 新光社(振替東京43240)
(電話神田 2656)

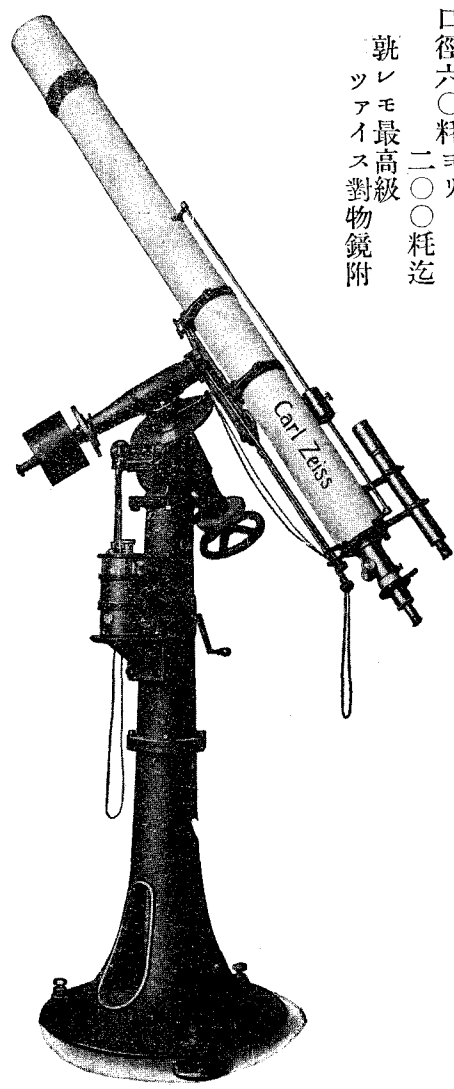
天界
 第十一卷第百二十七號(十一月號)昭和六年十月二十五日發行
 大正九年十二月二十四日第三種郵便物認可(每月一回二十五日發行)

ZEISS

ツァイス望遠鏡

地上及天體觀察用各型望遠鏡

口径六〇耗ヨリ
 二〇〇耗迄
 孰レモ最高級
 ツァイス對物鏡附



(型錄アリ Astro 14
 附記御報次第進呈)

カール
 ツァイス
 株式會社

東京丸ノ内郵船ビル
 電話丸ノ内三〇〇六六五

